

現場の第一線で国際緊急援助隊員が活躍できるように支えたい

出発点はアフリカの子どもたち

海外で災害が発生した時、日本から国際緊急援助隊を派遣するJICA国際緊急援助隊事務局。現場で隊員たちが全力で活動できるよう、佐藤隼人職員をはじめとした事務局スタッフたちがサポート体制を整えている。



タイ洪水への対策のため、JDR専門家チームと排水計画を検討する佐藤さん(左端)

国際緊急援助隊を災害現場へ

私が国際緊急援助隊(JDR)事務局で担当している仕事は、災害時の対応や隊員への訓練や研修などです。海外で災害が発生した時、救助チーム、医療チー

「ジンバブエという国を知っていますか?」小学生の時、学校でユニセフの募金活動をする事になり、全校集会でアフリカの貧困について発表したことがあります。日本での当たり前が通じない国がある。それを知ったのが、国際協力に関心を持つ種でした。大学時代にカンボジアへのボランティアツアー、ケニアの林業研究所でのインターンなどを経験して、将来は開発途上国が抱える課題と向き合う仕事をしたいと思うようになった。そのころ、バレーボールのコーチをしていたのですが、自らコートに立つのではなく、一歩下がって選手たちをサポートし、彼らの良さを引き出すために縁の下で支える立場が自分に合っていると感じました。国際協力の現場の第一線で活躍する人たちがサポートできれば。そんな思いからJICAに就職しました。

JICA職員は縁の下の力持ち

隊員たちが活動に集中できるように、JICA職員は現場でもサポートしています。昨年に発生したタイの大洪水では、私も専門家チームの業務調整員として派遣され、現地関係者との調整から、移動

ム、専門家チームを派遣したり、緊急援助物資を送ったりするのが私たちの役割。まさに時間との闘いですので、普段から念入りの準備が重要です。その一環として、事務局内では定期的にシミュレーションを実施しています。例えば、アジアのある国で大地震が発生したと仮定し、現地事務所や関係機関との連絡、フライトの調整、資機材の準備、隊員の選定など、一人一人が短時間で臨機応変に動けるように準備しています。

また、JDR登録者のスキルアップのため、年間を通じて訓練・研修を開催しています。救助チームは世界標準の技術を維持できるよう、また医療チームは登録者が災害現場で生かせる専門知識を深められるよう、JDR経験者の方々のほか、警視庁や兵庫県から事務局に派遣されている職員のサポートも得ながら、訓練・研修の改善のために検討を重ねています。



国際緊急援助隊事務局
研修・訓練課 兼
緊急援助課

佐藤 隼人
SATO Hayato

大学院卒業後、2009年にJICAに就職。地球環境部を経て、2011年7月から現職。



各自が迅速に対応できるよう災害対応のシミュレーション訓練に臨むJDR事務局のスタッフたち

手段、宿泊施設の手配まで、裏方の仕事に奔走しました。移動中に車両が故障したり、現地の作業員が集まらなかったりと予想外のことが起こり、機転を利かせて対応することの重要性を学びました。

JDR隊員はプロフェッショナルな方たちばかりです。一人でも多くの人を助きたい。その明確な目的に向かう彼らの熱意は並大抵ではありません。私たちJICA職員は、彼らが現場の第一線で全力で活動できるよう、縁の下で支える役割を担っています。今後も、世界の災害現場に迅速に支援を届けられるよう、日々着実に準備を重ねていきます。